

全道合研2022

第8分科会 音楽教育のまとめ

釧路市立鶴野小学校 山口政世

1 はじめに

今回は、共同研究者の石窪氏が不参加となり、共同研究者1名、司会者2名、一般参加者2名の計5名で行った。

レポートは1本だったが、参加者の実践についても話してもらい、みんなで交流することができた。

2 実践報告

「音楽と共に育つ」

山口政世（釧路市立鶴野小学校）

小学校知的学級1～3年生の成長を音楽のある生活としてまとめた実践報告。

4月は通常学級から2年生3名が入り、新1年生1名と元からいた3名との7名でスタートした。

それぞれの特性や課題に対応したはたらきかけと授業づくり、友達との関わりを深めること、身近な自然との関わり、そして季節や子どもの生活から選んだ曲を歌うことを大切にしました。子どもたちの歌7曲の録音も発表された。

曲「おおかぶと」	松岡慈元 詩	工藤吉郎 曲	
曲「ポランの広場」	宮沢賢治 詩	丸山亜季 曲	他

討論では、行事や発表のためのうたではなく、朝の会で自由に歌うこと、CDではなく教師が自ら歌って教材を子どもたちに渡すこと、子どもたちに合った教材を選ぶことの素晴らしさが指摘された。どれも子どもたちが楽しく、主体的に歌うために必要なことだと再確認できた。また、その中で「音楽は友達づくり」という言葉も紹介された。

参加者からは、「コロナ禍という状況の下、音楽の授業でどのような工夫をしているのか知りたい」という要望が出され、それぞれの学校の様子を交流した。

都市部ではコロナ感染者が増え、コロナとの共存を目指すような雰囲気があり、感染対策をしつつ歌ったり、リコーダーや鍵盤ハーモニカを演奏したりすることができている。学芸会、学習発表会でも歌や演奏に取り組むことができた。

一方で離島では、家族に高齢者が多いこと、重症になったときに島内では治療ができない

ことなどから、コロナへの警戒感が強く、歌ったり演奏したりという音楽の授業は難しいという。

そんな状況の下、歌わなくてもできる音楽を模索し、学芸会ではカップス、パーカッションを中心としたサンバの曲を器楽合奏で発表し、総合学習で学んだことをもとに歌を作って YouTube で配信するなど、工夫して取り組んでいた。

また、共同研究者からは和太鼓やアイヌの踊りなどの民俗芸能の話題が提供され、次年度の分科会で報告する見通しとなった。

まとめ

人数的にも時間的にもコンパクトながら、充実した分科会になった。

レポート報告を受け、改めて子どもたちにとって歌うとは、音楽とは何かを考えることができた。

子どもたちは毎日友達と遊び、学び、何かを感じている。閉塞感が充満している今こそ、音楽の中で自由に自分を表現できる時間が、子どもたちの成長に欠かせないものになっている。